

第19回 日本SPF豚研究会 講演要旨

於 平成21年6月26日 東京大学山上会館

1) 平成20(2008)年度 日本SPF豚協会年次報告

日本SPF豚協会 藤田 世秀

平成21年3月末現在のSPF豚認定農場は184農場(内GGP、GP農場22、一貫生産・繁殖専門農場138、子豚育成専門農場2、肥育専門農場22)であった。昨年より、一貫生産・繁殖専門農場が8農場減少したが、肥育専門農場が7農場増加し、全体では1農場減であった。飼養母豚数は、既存農場の減少はあったが母豚規模が小さく、新しく認定された農場の規模が大きかったため、75,144頭と3,418頭(4.8%)増加した。

生産成績をみると、一貫生産農場では1母豚あたり年間肉豚出荷頭数、出荷肉豚1頭あたりA分類薬品費、総合生産指数の改善が見られた。農場回転数、農場飼料要求率は横ばいであった。繁殖専門農場では1母豚あたり年間分娩回数、1母豚あたり年間離乳子豚頭数、1母豚あたり年間出荷子豚頭数、出荷子豚1頭あたりA分類薬品費、総合生産指数の全ての項目で改善がみられた。肥育専門農場では飼料要求率、肉豚出荷率、総合生産指数が改善された。しかし、出荷肉豚1頭あたりA分類薬品費は増加した。

2) 食用以外に利用される豚について

(財)日本生物科学研究所 齋藤敏樹

食用以外に利用される豚としては、実験用、愛玩用などが知られている。現在、実験用豚は使用分野別でみると安全性試験、循環器系試験、代謝・薬物動態試験、再生医療、異種移植などに利用されている。これまで2~3ヶ月齢の若齢家畜豚が主に使用されてきたが、近年その取扱いの容易さと品質(遺伝的均一性と微生物学的統御)からミニブタの利用が広まりつつある。しかし、実験動物としてのミニブタはクローズドコロニーで生産されているが、安定した需要が見込め無いために生産体制拡充の妨げの一因となってきた。ミニブタの利用拡大には、遺伝的均一性を有し微生物学的統御されたミニブタを安定的に供給できる生産体制の確立と利用者側の意識の転換(家畜豚の代用ではなく実験動物である)、医学領域に関わる特殊な形質を持ったモデルブタの作出、そして背景データの蓄積が必要である。

演者は愛玩用豚の飼育状況をほとんど知らないため(インターネットで検索すると多数のウェブサイトがヒットしてくることから、愛玩用として飼育されているミニブタはかなりの数に上ると思われる。)、今回これまで携わってきた実験用小型豚(ミニブタ)の利用状況についてご紹介する。

3) アニマルウェルフェアの考え方に対応した豚の飼養管理指針について

農林水産省生産局畜産部畜産振興課 菅谷 公平

欧州においては、1960年代に、密飼い等の近代的な畜産のあり方についてその問題点が提起され、英国で提唱された「5つの自由」を中心に「Animal Welfare」の概念が普及し、現在ではEU指令として、「Animal Welfare」に基づく飼養管理の方法等が規定されている。また、国際獣疫事務局(OIE)においても、アニマルウェルフェアに関する基準(ガイドライン)の検討が始まり、2005年には輸送やと畜に関するガイドラインが策定され、現在、畜舎や飼養管理に関するガイドラインの検討が進められている。

一方で、我が国において、経済のグローバル化による輸入畜産物の増加に対応しつつ、消費者のニーズに合った安全・安心な国産畜産物を供給することにより、今後とも畜産が安定的に発展していくためには、家畜の生産性の向上を図っていくことが重要な課題である。家畜の管理を行う上で、アニマルウェルフェアに対応し、家畜を快適な環境で飼うことは、家畜が健康であることによる安全・安心な畜産物の生産につながり、また、家畜の持っている能力を最大限に発揮することにより、生産性の向上にも結びつくものと考えられる。

本発表では、海外のアニマルウェルフェアをめぐる状況とともに、今般、我が国においてとりまとめられた「アニマルウェルフェアの考え方に対応した豚の飼養管理指針」の概要について報告する。

4) アニマルウェルフェアから見たブタの行動と快適な飼育環境

茨城大学農学部附属フィールドサイエンス教育研究センター 小針大助

食の安全と畜産物の質の保証の観点から、近年アニマルウェルフェアに基づく家畜管理の国際的な基準策定の動きが盛んになっている。特にEUではアニマルウェルフェアを新世紀からの新たな畜産戦略の一つとして重視しており、消費・流通・生産など様々な面において数十億から数百億円規模のプロジェクトを展開している。ブタの飼育管理では、特に繁殖ストールでの飼育による身体の拘束性、行動の制限性が問題視されている。EUでは2013年までに繁殖豚の周産期外のストール飼育を廃止することが決められており、代替法の開発・研究が進められているが、条件や気候が異なるわが国では必ずしも適したものばかりとはいえない。そこで、本講演では、このような欧米のアニマルウェルフェアの動向について、近年の行動研究の紹介を交えながら、豚の飼育において何が問題とされているのか、また、望ましい飼育環境とはどのようなものかということについて考える。

／以上